

社会の多様な現場でのコミュニケーションを伴うアート活動の展開

ゴブリンプロジェクトの継続における現地協働運営者の存在意義

小中大地

筑波大学大学院人間総合科学研究科博士後期課程芸術専攻

キーワード：アートプロジェクト／協働／コミュニケーション／世界遺産／病院のアート

要旨

本稿は、社会の多様な現場でのコミュニケーションを伴うアート活動の継続における、現地協働運営者の存在意義を具体的に明らかにすることを目的とするものである。

社会の多様な現場でのコミュニケーションを伴うアート活動を実現して継続するためには、活動をアーティストと協働で運営する現地協働運営者の存在が重要となる。筆者は10年以上の間、コミュニケーションを伴うアート活動「ゴブリンプロジェクト」を社会の多様な現場で実施してきた。本稿では、このゴブリンプロジェクトの過去活動を研究対象として論じた。

まず、これまでのゴブリンプロジェクトの中の2プロジェクト「白川村ゴブリンプロジェクト」「小児科ゴブリンワークショップ」における現地協働運営者の具体的な役割を記述し、そこからコミュニケーションの目的を見出してカテゴリー化することができた。そして、それらを分析することで、2プロジェクト間の現地協働運営者の存在意義における共通点と相違点を整理することができた。共通点には、継続の中でコア協働運営者が徐々に主体性を得ながら活動を支えている点などがあった。一方、題材の考案プロセス、参加への促し、声量、記録、取材対応の面において相違点が見出された。

Developing Art Activities with Communication at Diverse Society Sites

The Significance of Existence of the Local Collaboration Enforcer in the Continuation of Goblin Project

KONAKA Daichi

Graduate School of Comprehensive Human Sciences, University of Tsukuba
Doctoral Program in Art and Design

Keywords: Art Project / Collaboration / Communication / World Heritage / Hospital Art

Summary

This paper examines collaboration enforcers in the context of art activities in communication within diverse areas.

A collaboration enforcer who collaborates with an artist is necessary for conducting artistic programs with appropriate communication within diverse areas. Over a period of more than ten years, the writer conducted the art program Goblin Project that involved communication in a diverse area. This activity is described in this paper.

The concrete role in collaboration enforcement have been described in this paper from "Pediatric Goblin Workshop" and "Shirakawa Village Goblin Project." The purpose of communication in this context were developed in those projects and they aided classification using categories. The commonalities and differences between the two projects were assessed, particularly in the role of the collaboration enforcer. This demonstrated how the programs were supported while the core collaboration enforcer gradually gained independence as the program continued. On the other hand, the differences within the actions related to the subject, promotion of participation, voice volumes, photographic recording, and coverage were assessed.

1 本研究の背景

1-1 社会の多様な現場でのコミュニケーションを伴うアート活動

現在、一般市民や施設利用者が造形作品の制作プロセスやその展示作品に参加したり、鑑賞のみではないかたちで人々が関与したりする形態のアート活動は、越後妻有アートトリエンナーレを代表とする地域での大型芸術祭の興隆も後押しとなり、従来からアート活動が展開されていた美術関連施設以外にも、社会の多様な現場（廃校や自然環境下、商店街や病院 等）へと広がっている^{注1}。

そして、それらの活動では、制作プロセスや展示時に、その現場の関係者、一般の参加者や鑑賞者、アーティスト^{注2}などの人々の間でコミュニケーションが生じる。活動に伴うこのようなコミュニケーションは、社会の多様な現場で展開されるアート活動における重要な価値である^{注3}。また、こうした活動を捉える用語であるアートプロジェクトについて、熊倉純子は「共創」という言葉により定義している³⁾。この共創を達成するためには、アート活動の中での有意義なコミュニケーションが必要となる。そして、このコミュニケーションにはアート活動と関連し合いながら「場の活性化」や「生きる活力の向上^{注4}」のような効果、さらに現場ごとの活動目的達成に向けての効果が期待できる。

つまり、こうした社会の多様な現場でのコミュニケーションを伴うアート活動は、アート作品自体やそれを制作したり鑑賞したりする行為の価値に加えて、人々の間に生じる会話をはじめとしたコミュニケーションにも価値が置かれたアートプロジェクトであると言える。その内容には、造形ワークショップ（以下「造形WS」と略記する）や、協働制作、また参加型のアート、公開制作などの、制作過程に人々のコミュニケーションが関わる表現形態が含まれる^{注5}。

1-2 現地協働運営者の重要性和継続の意義

コミュニケーションを伴うアート活動を社会の多様な現場で展開するためには、活動の実現に向けてアーティストをサポートする現地の協働運営者の存在が重要となる。

例えば、越後妻有アートトリエンナーレにおいては、その実現に向けて協働で動いた現地の住民に関するエピソードが北川フラムによって述べられており、受け入れた現地住民が協働運営者として存在したことが芸術祭を成立させる上で重要であったことが分かる⁶⁾。

また、医療と福祉の現場で「アーツアライブ」という活動を展開する林容子は、自著において、高齢者福祉施設で高齢者の参加をサポートする職員が「作家とお

年寄りをつなげるという役割の中で、プロジェクトに参加している」と説明し、（そういった職員の）「協力を得るには、施設の職員のプロジェクトに対する理解と応援が欠かせないのはいうまでもない」と述べている⁷⁾。ここでは、この施設職員もアーツアライブの協働運営者であると言える。

これらの事例のように、アート活動を本来アートが展開されていなかった様々な社会現場に導入していくためには、元々その現場に携わる人々が活動を受け入れ、協働運営者として活動に関与する必要がある。そして、その現場が実現困難な現場であるほどその存在は重要となる。

以上より、本稿では社会の多様な現場でのコミュニケーションを伴うアート活動における現地協働運営者に着目する^{注6}。また、社会の多様な現場でのコミュニケーションを伴うアート活動が実現した後、同現場で再度活動が実施される場合がある。この、活動が「継続する」意義として、前述した「コミュニケーション」「場の活性化」「生きる活力の向上」といった効果、また現場ごとの活動目的達成に向けての効果を重ねられる。そして当然、活動の継続においても現地協働運営者の存在が重要となる^{注7}。

2 本研究の目的・意義と方法

2-1 本研究の目的・意義

本稿では、社会の多様な現場でのコミュニケーションを伴うアート活動の継続における、現地協働運営者の存在意義を具体的に明らかにすることを目的とする。このことが明らかになれば、様々なアート活動におけるアーティストや活動関係者が現地協働運営者の存在意義を理解し具体的理念として持ち、有意義な活動を継続・拡大させていくことに寄与できると考える。

また、参加者が絞られる芸術施設ではなく、不特定の人々の目にふれる現場で実施される活動や展示される作品に対して好意的ではない声上がるケースもみられる。それが住民との企画段階での議論や造形WS等によりコミュニケーションを交えて制作された作品であったとしても、SNS等により批判され、展示形態を変更するという事態も生じている⁹⁾。このような事態を防ぐという面でも、現地協働運営者の存在意義は多大にあると考えられよう。

2-2 本研究の方法

2-2-1 研究対象：ゴブリンプロジェクトについて

本稿では、社会の多様な現場でのコミュニケーションを伴うアート活動の継続における現地協働運営者の

存在意義を具体的に明らかにするために、筆者が実施してきたアート活動「ゴ布林プロジェクト（以下「ゴ布林P」と略記する）」を研究対象とする。

筆者は2005年よりアーティストとして、ゴ布林Pを継続的に実施している^{注8}。「ゴ布林」とは「妖精」が原義で^{注9}、プロジェクト上では身の回りの物や事柄を生き物（その物や事柄に宿る妖精）に見立てて制作した造形作品のことを指す。対象となる物は、短い鉛筆から巨大な建築物まで様々で、そのサイズ感や性質も多様となる^{注10}（図1、図2）。これらの対象とする物や事柄を、表現の主題を形成する条件であることから、以下「主題形成条件」と表記する。また、主に一般の人や施設利用者がプロジェクトに関わる場面では、筆者はペイントを施した白衣^{注11}を着て「ゴ布林博士」と称して活動している。



図1 《鉛筆ゴ布林》、2011



図2 「世界遺産アートプロジェクト 合掌ゴ布林をつくらう!!」、白川村合掌造り集落／岐阜県大野郡白川村、2015

これまでの活動数は、その規模の大小を合わせると約160件で、実施都道府県・海外都市数としては1都1道2府15県2海外都市となる（2018年4月現在）。そして、その実施施設・空間は大別すると、「地域施設・空間」「学校施設」「複合商業施設」「芸術施設」「ケア施設」と分けられる。

このように、ゴ布林Pでは筆者がアーティスト（兼ファシリテーター）として社会の多様な現場に出向き、芸術を専門としない人々とも双方向のコミュニケーションをとり、関係性を築きながらプログラムや作品づくりを進めて実現させてきた。つまり、身の回りの物や事柄を主題に用いるという作品の性質と、協働性に支えられるという筆者の制作スタイルから、現場や人々への依存度が高い活動であることが特徴であるとも言えよう。

2-2-2 方法と手順

本稿では、現地協働運営者の存在意義を具体的に明らかにするために、進行段階ごとに立場の異なる現地協働運営者の役割とコミュニケーションの目的を分析していく。そのために、まずは実践を手がかりとして、ゴ布林Pにおける「主な関係者」「段階」「コミュニケーション」について述べる^{注12}（第3章）。次に、これまでのゴ布林Pの中で3回以上継続実施し、さら

に継続期間が同程度だが場の性質が異なるプロジェクトから2件（「白川村ゴ布林プロジェクト」：地域の現場／「小児科ゴ布林ワークショップ」：ケアの現場）を取りあげ、現地協働運営者の役割を記述し、コミュニケーションの目的をカテゴリー化する（第4章）。そして、それらを分析することで、2プロジェクト間の現地協働運営者の存在意義における共通点と相違点を整理する（第5章）。

3 ゴ布林Pの「主な関係者」「段階」「コミュニケーション」

3-1 ゴ布林Pにおける主な関係者

(1) **アーティスト**：アート活動を実践する人。活動内容を考案する「発案者」、進行等役の「ファシリテーター」、制作へのアドバイスを送る「指導者」、協働制作や単独制作による「制作者」の役割などを兼ねる。

(2) **現地協働運営者**：活動実現に向けてアーティストをサポートする、現地の協働運営者。「実施団体実務者」「コア協働運営者」「現地サポートスタッフ」から成る。

・**実施団体実務者**：活動を発案してアーティストに依頼したり、活動の実現に向けた様々な仕事を担当したりする現地実施団体等の実務者。

・**コア協働運営者**：アーティストとの協働を中心となって実行する人で、基本的には実施団体実務者の中に存在する。

・**現地サポートスタッフ**：現地の補助的スタッフで、住民がボランティアで行う場合もある。施設利用者の参加を促す現場職員も該当する^{注13}。

（現地の外からの協働運営者を意図的に示す場合には、その旨を補記することとし、協働運営者のみの表記は現地／現地外を問わないものとする。）

(3) **参加者**：主に活動の本番段階（造形WS開催中やアーティストとの協働制作時）に参加する一般の大人や子ども、施設の利用者（実施団体実務者ではない施設関係者）。

(4) **鑑賞者**：主に成果作品の展示段階で、作品を鑑賞する一般の大人や子ども、施設の利用者（実施団体実務者ではない施設関係者）。

3-2 ゴ布林Pの進行過程における段階

ゴ布林P進行過程の段階について述べる。

1) **依頼段階**：実施団体実務者がプロジェクトの構想を立て始め、アーティストに依頼する段階。

2) **企画・準備段階**：アーティストが現地に赴く前に実施団体実務者とアーティストによって行われる、企画・

準備に関する段階（目的の共有、プログラムの構想、必要物品の購入、準備制作 等）。

3) 現地準備段階：アーティストが現地に到着してから本番段階前までの、現地における準備段階（現地ミーティング、準備制作 等）^{注14}。

4) 本番段階：主に一般参加者や施設利用者が参加する段階で、協働運営者とアーティストは、参加者の制作サポートや参加者との協働制作などに取り組む。

5) 展示段階：来場者や施設利用者が展示された成果作品を鑑賞し、展示中の参加が可能な作品であれば参加する段階。展示作品は協働運営者が管理する。

3-3 ゴ布林Pにおけるコミュニケーション

依頼段階から展示段階において、主な関係者の間で「会話」「協働作業」「ふれあい」など、様々なコミュニケーションが生じる。また、これらの直接的なコミュニケーションのほか、現地準備段階や本番段階での制作者に向けての「見守り」「見学」「鑑賞」などの間接的なコミュニケーションも生じる。

4 継続プロジェクトにおける現地協働運営者の役割

4-1 プロジェクト1：白川村ゴ布林プロジェクト （実施数：3（2018年4月現在））

4-1-1 プロジェクトの概要

【1st】合掌ゴ布林をつくろう！

2014年末から翌年にかけてアーティスト（筆者）が筑波大学内で実施した展覧会^{注15}に、別件で来校していた白川村教育委員会文化財係のA氏が訪れたことをきっかけに、合掌造り集落の世界遺産登録20周年記念イベントの一つとして2015年の夏に現地の住民（子どもや大人）が制作に参加するかたちで初回の企画が実現した（この企画を、以下「合掌造り企画」と略記する）。

イベントでは、「合掌造り」をもとにした、手のひらサイズの《ミニ合掌ゴ布林》と、実物の合掌造りによる《合掌ゴ布林（図2）》の2タイプの作品や、《石垣ゴ布林》などが制作された。また、サポートスタッフとして筑波大学生2名も同行した。そして、イベントから数ヶ月後の同年11月には、現地で開催された記念イベント内で活動記録写真を展示した（表1）。

表1 合掌造り企画の基本データ

プロジェクト名	世界遺産アートプロジェクト 合掌ゴ布林をつくろう！
開催日	2015年8月7日 （現地準備段階＝8月5、6日／屋外作品の展示期間＝8月10日まで）

	※世界遺産登録20周年記念フォーラム内で記録展「合掌ゴ布林展」を開催（2015年11月27日）
場所	荻町多目的集落施設 ほか
対象者	白川村の住民（子ども、大人） （参加者＝計約75名）
アート活動の内容	手のひらサイズの《ミニ合掌ゴ布林》を制作する造形WS、実物の合掌造りによる《合掌ゴ布林》と実物石垣による《石垣ゴ布林》の協働制作、作品持ち帰り箱への装飾

【2nd】白弓ゴ布林スキー場

第一回目の活動を経て、ゴ布林Pを村内のプロジェクトに活用したいという村役場職員の着想により、村内スキー場施設での活動が実現した（この企画を、以下「スキー場企画」と略記する）。沖縄県読谷村との交流事業の中で実施されたため、白川村と読谷村の小学6年生や引率の読谷村こども会育成連絡協議会役員が参加したほか、白川村の小学6年生以外の子ども達や大人も参加した。また、アーティスト（筆者）が依頼したサポートスタッフとして、前回と同じ大学生2名も現地に滞在した。

内容は、前半はスキー場のレストラン内にて合掌造りの建築材「ネソ」を用いた《ネソゴ布林》、色鮮やかなうちわによる《うちわゴ布林》、雪を詰める《カップ雪ゴ布林》を制作する造形WSが行われ、後半は屋外にて《雪像ゴ布林（図3：手前）》を制作する造形WSと、ゲレンデ全体を作品化する《ゲレンデゴ布林（図3：全体）》の協働制作が行われた。そして、イベント終了後も残りのスキーシーズンの間、施設ロビーに展開された過去ゴ布林Pの記録写真などによる簡易展示は残された（表2）。

表2 スキー場企画の基本データ

プロジェクト名	白川郷ふるさとカルタ学 第6講座 白川郷の雪景色にゴ布林発見！ ～雪降れば 子ども喜ぶ 大人泣く～
開催日	2017年2月18日 （現地準備段階＝2月16、17日／ロビーでの簡易展示＝2月18日～スキーシーズン終了時期）
場所	白川郷平瀬温泉白弓スキー場
対象者	白川村の住民（子ども、大人）／読谷村の子ども（小学6年生）と読谷村こども会育成連絡協議会役員 （参加者＝計約70名）
アート活動の内容	《ネソゴ布林》《うちわゴ布林》《カップ雪ゴ布林》《雪像ゴ布林》を制作する造形WSと、《ゲレンデゴ布林》の協働制作

【3rd】白山ゴ布林をつくろう！

白山開山1300年記念の登山イベント内で「白山」と「翠ヶ池」から2種類の造形WS（1日目が《白山ゴ布林（図4）》制作、2日目が《翠ヶ池ゴ布林》制作）が、現地の子どもと大人を対象に実施された（この企画を、以下「白山企画」と略記する）。ただし、白山企画はアーティスト（筆者）が同行できなかったため、アーティスト不在での実施となった。そのため、制作直

前には参加者に向けてアーティストからのメッセージ動画が流された。また、材料の準備（物品の買い出し、材料の主な準備加工）はアーティストが事前に行い、実施にあたっての大人向け指示書を含む材料セット一式が現地に届けられた（表3）。

表3 白山企画の基本データ

プロジェクト名	白山開山 1300 周年記念アート 白山ゴブリンをつくろう！
開催日	2017 年 8 月 26、27 日
場所	白山
対象者	白川村の住民（子ども、大人） （参加者：計約 25 名）
アート活動の内容	《白山ゴブリン》《翠ヶ池ゴブリン》を制作する造形 WS ※アーティスト不在型での実施／参加者は制作前にアーティストからのメッセージ動画をタブレット型コンピュータにより鑑賞



図3（左） 全体＝《ゲレンデゴブリン》、手前＝《雪像ゴブリン》



図4（右） 《白山ゴブリン》

4-1-2 現地協働運営者の全容と役割

白川村で開催された上記3件のゴブリンP(3件)を合わせて「白川村ゴブリンプロジェクト」とし、以下「白川村企画」と略記する)について、現地協働運営者とその役割を整理し、コミュニケーションの目的をカテゴリー化する。

【1st】合掌造り企画の現地協働運営者と役割

主な現地協働実施者は白川村役場の職員であった。中でも、アーティスト(筆者)と筑波大学内で出会った村役場職員のA氏は、コア協働運営者として実現に向けて動いた。そして、村役場職員のB氏は、アーティストが白川村に滞在した現地準備段階にて準備制作に関わり、職場体験としてサポートに来ていた中学生1名に付き添った。また、村役場職員のC氏は、イベント本番で意識的に声を出して参加した子ども達の気分向上を促した。ほかに、地域おこし協力隊のD氏は、本番段階の写真撮影や搬出作業を行った。さらに、村役場職員数名がイベント当日のサポート業務を行った。また、参加した子どもの保護者のE氏は茅葺き職人であったため、屋根に登り《合掌ゴブリン》の制作をサポートした。そして、イベント本番中には参加中の子ども達の中に、自分の制作を行いながら近い席の低年齢の子どもに対してアドバイスを送る小学校高学年児童や中学生の姿が見られた(表4、表5)。

表4 合掌造り企画の現地協働運営者

表記	所属	人数	現地協働運営者の別
A氏	村役場職員	1	コア協働運営者
B氏	村役場職員	1	実施団体実務者
C氏	村役場職員	1	実施団体実務者
D氏	地域おこし協力隊	1	実施団体実務者
E氏	参加子どもの保護者	1	現地サポートスタッフ
村役場職員(当日スタッフ)	イベント当日の現場サポート業務を行った村役場職員	数人	実施団体実務者
サポート中学生	職場体験にて参加した村の中学生	1	現地サポートスタッフ
サポート小・中学生	参加した白川村の子ども	数人以上	現地サポートスタッフ

表5 合掌造り企画 現地協働運営者の主な役割

段階	現地協働運営者	役割【コミュニケーションの目的】
1) 依頼	A氏	アーティストに企画を依頼(活動の依頼)
2) 企画・準備	A氏	村内の会議にて村の関係者に向けてゴブリンPや企画のイメージについて説明(場の人々への配慮)事前の下見時も含め、アーティストとコミュニケーションをとりながら活動内容を検討(現地情報の伝達)〔アート活動プログラムの検討〕茅葺き屋根への顔パーツ取り付け方法について、A氏が知識に基づいた方法を提案〔実現させるための手法の検討〕
3) 現地準備	A氏	準備制作をサポート〔準備造形作業の伝達〕
	B氏	アーティストから聞いた指示を中学生と共有し、中学生の作業を手伝ったり自ら作業したりした〔アート活動のプログラム伝達〕〔支援を目的とした空間共有〕
4) 本番	サポート中学生	中学校の職場体験のプログラムで、《合掌ゴブリン》用の顔パーツを制作〔準備造形作業の伝達〕
	C氏	集合写真撮影時に声量のあるかけ声を出して子ども達の笑顔を引きだし、場を活気づけた〔場の演出と活性化〕
	D氏	イベント本番中の写真撮影係を担当〔記録〕
	A氏、B氏、E氏	屋根の上に登り、《合掌ゴブリン》の顔パーツ設置作業を行った〔準備造形作業の伝達〕
	村役場職員(当日スタッフ)	アーティストの指示に従って、A氏、B氏、E氏とともに《合掌ゴブリン》の顔パーツを設置〔準備造形作業の伝達〕アーティストによる顔パーツの位置を決め・微調整に協力〔造形の制作〕
	サポート小・中学生	理解した制作のコツを、低年齢の参加者にアドバイス〔造形の制作〕
5) 展示	A氏	合掌ゴブリン展示中の補修〔展示管理や搬出に関する連絡〕

【2nd】スキー場企画の現地協働運営者と役割

村役場職員B氏が、この企画ではコア協働運営者としてアーティストと密にコミュニケーションをとった。また、村役場職員C氏は依頼段階からアーティストと連絡を取り合い、企画の場所や実施時期などの基本計画づくりに携わった。一方、A氏との関わりは減少した。そして、前回、写真撮影係を担当した地域おこし協力隊D氏は退職していたが、イベント当日の撮影係の依頼を受け、遠方から来村してサポートにあたった。また、現職の地域おこし協力隊F氏も映像撮影係として当日のサポート業務を行った。ほかに、イベント本番中には小学校高学年の児童が低学年の児童の制作をサポートする様子も見られた(表6、表7)。

表 6 スキー場企画の現地協働運営者

表記	所属	人数	現地協働運営者の別
A 氏	村役場職員	1	実施団体実務者
B 氏	村役場職員	1	コア協働運営者
C 氏	村役場職員	1	実施団体実務者
D 氏	元地域おこし協力隊	1	現地サポートスタッフ
F 氏	地域おこし協力隊	1	実施団体実務者
スキー場スタッフ	白弓スキー場	数人	現地サポートスタッフ
サポート小学生	参加した白川村と読谷村の子ども	数人以上	現地サポートスタッフ

表 7 スキー場企画 現地協働運営者の主な役割

段階	現地協働運営者	役割【コミュニケーションの目的】
1) 依	C 氏	アーティストと連絡を取り合い、企画の場所や実施時期などの初期の基本計画を立案【活動の依頼】
2) 企・準	B 氏	アーティストと連絡を取り合いながら、ゲレンデ上で素材や設置方法などを検討／《ゲレンデゴブリン》の目の輪郭部分にあたる素材の固定は、雪上に慣れている B 氏からの的確なアドバイスにより実現【実現させるための手法の検討】 パケツ類を型として制作する雪の作品の名称《雪像ゴブリン》をアーティストに提案【現地情報の伝達】 《ネソゴブリン》用の木材を保有者に連絡して入手し、アーティストからの指示によるイメージに合わせて、一人で切断・やすりがけの加工を行い全参加者分の材料を揃えた【企画・準備段階の諸連絡】【準備造形作業の伝達】
	B 氏、C 氏	《ゲレンデゴブリン》の設営実験にあたり、アーティストと確認を取り合いながら数度に渡ってゲレンデ内で作業【実現させるための手法の検討】
3) 現準	A 氏、B 氏、C 氏	《ゲレンデゴブリン》のプレ設置ではゲレンデ内に入り、アーティストからの指示を受けながら位置の調整等【準備造形作業の伝達】
4) 本	B 氏	イベント本番の前半まで（アーティストは室内での造形 WS 対応のため不在）、白川村大人や読谷村こども会育成連絡協議会役員に指示を送って《ゲレンデゴブリン》の目の輪郭部分を協働で制作【造形の制作】
	C 氏	声量のある声を出して、場を活気づけた【場の演出と活性化】
	D 氏	随時写真撮影【記録】
	F 氏	ときに参加者に声をかけながら動画撮影【記録】
5) 展	サポート小学生	低年齢参加者の制作をサポート【造形の制作】
	スキー場スタッフ	簡易展示の延長をアーティストと B 氏に打診【展示管理や搬出に関する連絡】

【3rd】白山企画の現地協働運営者と役割

村役場職員 A 氏が、再びコア協働運営者としてアーティストとコミュニケーションを取りながら活動計画を立てた。また、前回の企画でコア協働運営者であった村役場職員 B 氏も、A 氏より頻度は少ないものの企画・準備段階からアーティストと連絡を取りあって、活動計画づくりや制作キット準備の実作業を行った。そして、前回のゴブリン P で映像撮影や編集を担当した地域おこし協力隊 F 氏は、今回は写真撮影係として参加した。特に、《白山ゴブリン》は透明プレートを手にかざして撮影した写真が作品となる活動であったため、撮影係の F 氏はプロジェクトを成立させるうえで重要な存在となった（表 8、表 9）。

表 8 白山企画の現地協働運営者

表記	所属	人数	現地協働運営者の別
A 氏	村役場職員	1	コア協働運営者
B 氏	村役場職員	1	コア協働運営者
F 氏	地域おこし協力隊	1	実施団体実務者

表 9 白山企画 現地協働運営者の主な役割

段階	現地協働運営者	役割【コミュニケーションの目的】
1) 依	A 氏	アーティストと実現性について話し合い、アーティスト不在型での実現を決定【活動の依頼】
2) 企・準	A 氏	登山イベントのスケジュールや場の情報をアーティストに伝え、作品の具体的な造形や実現方法を、連絡を取り合いながら決定【アート活動プログラムの検討】
	B 氏	アーティストからの疑問に答え、プログラムについて意見を述べた【現地情報の伝達】
3) 現準	A 氏	アーティストからの、制作キットを作るにあたっての質問（登山時の運搬など）に回答【実現させるための手法の検討】
	B 氏	アーティストに代わって制作キット内の材料の準備を完了させた【準備造形作業の伝達】
4) 本	A 氏	タブレット型コンピューターを使ってアーティストからのメッセージ映像を参加者に見せ、補足説明をしながら材料を配布【アート活動のプログラム伝達】
	A 氏、B 氏	参加者に制作へのアドバイスを送ったり、それをきっかけとした会話をしたりした【造形の制作】 随時、プログラムの進行状況や、協働運営者の動き、その後の流れについて確認し合った【イベント実施中の確認や対応】 作品の写真撮影をサポート【記録】
	F 氏	参加者に声をかけて動きや表情を引き出しながら作品の写真撮影を行った【記録】
5) 展	A 氏	記録写真を南部地区文化会館に展示【展示管理や搬出に関する連絡】

4-1-3 小括：役割の分析とコミュニケーション分類

【1st】の合掌造り企画では指示に従う様子にとどまっていた B 氏の主体性が、活動の継続とともに向上した^{注 16}。具体的には、設営方法や作品名を提案したり、アーティストが一時的に不在の間に関係者に指示して大型の協働制作を進めたりするなど、活動への主体的な関わりがみられるようになった。また、【3rd】の白山企画では、企画自体をアーティスト不在で実現させることもでき、イベント本番中は特に A 氏、B 氏が自身の判断で主体的に企画に関わったことが分かる。

そして、役割から見出したコミュニケーションの目的を、さらに「創造が主目的」「現実化が主目的」「交流が主目的」の 3 カテゴリーで分類し、それらをさらに「双方向重視」と「伝達重視」の 2 カテゴリーでも分類することができた（表 10）。

表 10 コミュニケーションのカテゴリー分類／白川村企画

カテゴリー	双方向重視	伝達重視
創造が主目的	アート活動プログラムの検討 記録 造形の制作	アート内容の伝達 準備造形作業の伝達 現地情報の伝達 アート活動のプログラム伝達 支援を目的とする空間共有
現実化が主目的	活動の依頼 場の人々への配慮 実現させるための手法の検討 準備進行状況の共有 イベント実施中の確認や対応 展示管理や搬出に関する連絡	準備作業の伝達 企画・準備段階の諸連絡
交流が主目的	場の演出と活性化 自由会話	感情伝達

4-2 プロジェクト2：小児科ゴ布林ワークショップ （実施数：105（2018年4月現在））

4-2-1 プロジェクトの概要

筑波大学附属病院内の小児患者が入院するエリア、小児総合医療センターにて、入院患者と患者家族を対象とした造形WSが、週に一度、アーティスト（筆者）によって継続的に実施されている（この活動を、以下「小児WS」と略記する）^{注17}。この定例の小児WSには院内保育士が協力し、参加患者の呼びかけや制作の補助など活動全体のサポートを行うことで、スムーズな進行が実現している^{注18}。

小児WSには、主に入院中の幼児から小学校低学年の患者が参加するが、小学校中学年、高学年や中学生の患者が参加することもある。そして、作品は基本的には患者が制作し、患者に付き添う保護者は、患者の制作を声かけや一部の作業を代わりに行うかたちでサポートしたり、一つの作品を患者と協働制作したりするほか、保護者自身が一人で一つの作品を制作することもある。また、各回の題材としては、アーティストによって毎回一つの主題形成条件と大まかな表現方法が決められ、材料や道具の準備もアーティストによって行われている。これまでの小児WSでは、例えば、紙コップを主題形成条件とした《紙コップゴ布林》制作、帯状の色画用紙によって作る輪を主題形成条件とした《輪っかゴ布林》制作など、数多くの題材が考案されてきた（図5）。

また、活動形態の変化段階の大枠からみて、【1st】萌芽期（1～2年目〈2014年3月頃～2016年3月頃〉）、【2nd】展開期（3～4年目前半〈2016年4月頃～2017年8月頃〉）、【3rd】拡大期（4年目後半～5年目始め〈2017年9月頃～2018年4月〉）の3段階に分けることができた。

【1st】萌芽期では、実施回数を重ねる中で小児WSが徐々に現場に定着していき、最初はプレイルーム内でのみ実施されていたかたちが、その日の患者の状況に応じて病室内でも実施されるようになった。また、病棟師長とアーティストのコミュニケーションをきっかけとして、参加者による作品の写真が談話室に展示された。

【2nd】展開期では保育士の依頼により、2年続けてアーティストが小児病棟内夏まつりの会場装飾をサポートした。最初の年（継続3年目）には、アーティストは夏まつりの前日から現場に滞在し、プレイルーム内のイベント（おばけ屋敷）のテーマに合わせた装飾を即興で制作していった。その際、保育士と患者1名に制作が伝播し、自然発生的に造形WSが行われた（アーティストはイベント本番のお化け役も行った）。さ

らに翌年（継続4年目）には、イベント（海賊船の探検）の装飾テーマに合わせて、事前の定例小児WS内で装飾への使用を想定した題材（主題形成条件：空き瓶、碇等）を実施した。すると、過去の小児WSの中で最も多い、一回の活動で約45体の作品が制作された。

【3rd】拡大期では、プレイルーム内の壁面にマグネットシートつきの作品が展示され始め、その展示範囲が大きく広がるという変化が生じた（図6）。また、これまで小児WSは木曜日の夕方に実施していたが、保育士からの提案があったことで、代わりに水曜日の午前中に実施する週も生じてきた。そのおかげで、夕方には病室を出られない患者が午前中の小児WSに参加できるという状況も生まれた（表11）。

表11 小児WSの基本データ（2018年4月現在）

プロジェクト名	小児科ゴ布林ワークショップ
開催期間	2014年3月開始、現在も継続実施中 （継続期間＝4年1ヶ月／実施回数＝計105回）
場所	筑波大学附属病院 小児総合医療センター プレイルーム、病室
対象者	主に幼児から小学校低学年の患者、患者家族、ときに小学校中・高学年や中学生の患者 ほか（延べ参加者患者数＝約390人）
アート活動の内容	【定例の小児WS】 毎回一題材を実施（一つの主題形成条件による題材／アーティストが考案） （例）《紙コップゴ布林》制作 《ガムテープゴ布林》制作 《輪っかゴ布林》制作 ほか多数
	【展示への展開】 ・談話室内に作品写真が展示された。 ・プレイルーム壁面に作品の展示が広がり、小児WSの開催時間外も患者が作品を鑑賞したり移動させて遊んだりした。
	【病棟夏まつりの装飾】 ・会場装飾を目的としたアーティストによる即興の制作や、自然発生的な造形WSが行われた。

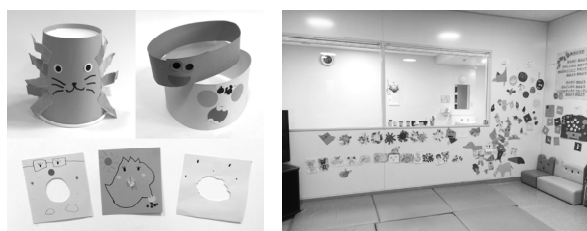


図5（左） 左上＝《紙コップゴ布林》※患者家族作、右上＝《輪っかゴ布林》※患者作、下＝《ホールゴ布林》※患者作（この題材は主題形成条件を「穴」とした）

図6（右） プレイルーム壁面に広がる小児WS作品の展示

4-2-2 現地協働運営者の全容と役割

小児WSの、時系列に沿った3段階、【1st】萌芽期、【2nd】展開期、【3rd】拡大期ごとに現地協働運営者とその役割を整理し、コミュニケーションの目的をカテゴリー化する。

【1st】萌芽期／小児WSの現地協働運営者と役割

小児WSの初回には、病院ボランティアA氏がアーテ

ィスト（筆者）に、手の洗い方など病棟内での基本的なルールを伝えた。それから、初回の活動以降は毎回、参加患者の呼びかけや活動部屋の検討、制作の補助など、保育士からのサポートのもとで実施された。また、ときおり近隣の教育機関に所属する医学や看護の実習学生が参加し、患者の制作補助や自身で一つの作品を制作するかたちで小児 WS をサポートした。アートコーディネーターの職員が、見学も兼ねてサポートに入ることもあった（表 12、表 13）^{注 19}。

表 12 萌芽期／小児 WS の現地協働運営者

表記	所属	人数	現地協働運営者の別
保育士	院内保育士	4	コア協働運営者
病棟師長	病棟看護師長	1	実施団体実務者
アートコーディネーター	筑波大学附属病院アートコーディネーター	2	実施団体実務者
A 氏	病院ボランティア	1	実施団体実務者
実習生	近隣の教育機関に所属（医学や看護の実習学生）	数人以上	現地サポートスタッフ

表 13 萌芽期／小児 WS 現地協働運営者の主な役割

段階	現地協働運営者	役割【コミュニケーションの目的】
1) 依頼	病棟師長、アートコーディネーター	アーティストからの相談を受けた【活動の依頼】
2) 企画・準備	病棟師長、アートコーディネーター	アーティストと小児 WS の実現に向けて具体的な方法を検討した【実現させるための手法の検討】
3) 現地準備	保育士	活動初回にて、アーティストの呼び名を「ゴ布林さん」と名付けた【自然な参加の導き】 実施日や実施直前には、保育士が参加可能な患者を見定め、開始前にそのような患者が病室にいた場合には呼びかけに行った【自然な参加の導き】 萌芽期途中から、実施日の患者状況から病室での実施を保育士が判断する回も生じるようになった【活動枠組みの新しい提案】
	A 氏	初回活動時、アーティストに手の洗い方など現場の基本ルールを伝えた【現場情報の伝達】
4) 本番	保育士	活動開始時に、初めてアーティストと対面する患者や患者家族に活動の目的を説明して、スムーズに開始するように促した【アート活動のプログラム伝達】 参加者の制作のサポートや、声かけ、見守りなどを行った【造形の制作】
	アートコーディネーター	活動が定着してきた時期に活動に同行し、制作の様子を見ながら会話をしたり、サポートしたりした【造形の制作】
	実習生	参加者の制作のサポートや、声かけ、会話、見守りなどを行った【造形の制作】
5) 展示	病棟師長	小児 WS 定着後、談話室への記録写真の展示展開をアーティストに相談し、実現させた【展示構想】

【2nd】展開期／小児 WS の現地協働運営者と役割

この期間には、病棟で実施した夏まつり会場装飾へのアーティストによる協力が始まったため、その装飾を目的とする自然発生的な小児 WS や定例の小児 WS において参加した入院患者や患者家族を協働運営者と捉えることができる。加えて、2016 年末には院内の外来棟廊下にてアーティストによる展覧会を開催していたという経緯から、その展示内容に関連した造形 WS を小児総合医療センター内でも実施し、作品を外来診療棟の廊下で展示した。その際には、アートコーディネー

ターが展示許可に関する事務的手続きをサポートした。ほかに、協働運営に直接は関係していないが、アーティストへの応援を直接伝える病院看護師 B 氏も現れ、アーティストのモチベーションが向上した（表 14、表 15）。

表 14 展開期／小児 WS の現地協働運営者

表記	所属	人数	現地協働運営者の別
保育士	院内保育士	5	コア協働運営者
アートコーディネーター	筑波大学附属病院アートコーディネーター	2	実施団体実務者
B 氏	病棟看護師	1	実施団体実務者
サポート患者・患者家族	装飾制作をサポートした入院患者と患者家族	14	現地サポートスタッフ
実習生	近隣の教育機関に所属（医学や看護の実習学生）	数人以上	現地サポートスタッフ

表 15 展開期／小児 WS 現地協働運営者の主な役割

段階	現地協働運営者	役割【コミュニケーションの目的】
1) 依頼	保育士	夏まつりへの協力をアーティストに依頼【活動の依頼】
2) 企画・準備	保育士	夏まつりへの協力を実現するために、関与方法や装飾内容などについてアーティストと話し合った【アート活動プログラムの検討】
	アートコーディネーター	作品を外来診療棟の廊下に展示するための手続きをアーティストとともに検討し、その実現に向けてサポートした【展示構想】
3) 現地準備	保育士	夏まつりの会場装飾をアーティストや患者、患者家族とともに制作したり、制作のサポートをしたりした【アート活動のプログラム伝達】 定例の小児 WS では、実施日や実施直前に参加可能な患者を見定め、開始前には病室に呼びかけに行くなどして参加を促した【自然な参加の促し】
	患者、患者家族	夏まつりに活用するための会場装飾作品を、小児 WS で制作するかたちでサポート【空間装飾の協働】
4) 本番	保育士	定例の小児 WS では活動開始時に、初めてアーティストと対面する患者や患者家族に活動の目的を説明して、スムーズに開始するように促した【アート活動のプログラム伝達】 参加者の制作のサポートや、声かけ、見守りなどを行った【造形の制作】 保育士の働きかけにより、参加できなかった患者のために材料を残していくという回が生じるようになってきた【活動枠組みの新しい提案】
	B 氏	小児 WS への共感と応援の言葉をアーティストに伝えた【賛同伝達】
5) 展示	アートコーディネーター	患者作品を外来診療棟の廊下に展示するための手続きについて、アーティストをサポート【展示構想】

【3rd】拡大期／小児 WS の現地協働運営者と役割

この期間には、ブレイルールの壁面へと広がった参加者による作品を、アーティストが不在の間にも、保育士が必要に応じて位置を整理したり手を加えたりする状況が生じた。また、水曜日の午前中に開催する週も増してきたため、水曜日が活動日である病院ボランティア A 氏が小児 WS を見学し、一部サポートに入ることもあった。また、外部取材者からアーティストへの取材依頼が入り小児 WS 実施中の取材が行われた際には、病院の広報担当職員 C 氏とアートコーディネーターが現場に滞在し、患者の個人情報保護への配慮等の対応をとった（表 16、表 17）。

表 16 拡大期／小児 WS の現地協働運営者

表記	所属	人数	現地協働運営者の別
保育士	院内保育士	4	コア協働運営者
アートコーディネーター	筑波大学附属病院アートコーディネーター	2	実施団体実務者
A 氏	病院ボランティア	1	実施団体実務者
C 氏	広報担当職員	1	実施団体実務者
実習生	近隣の教育機関に所属（医学や看護の実習学生）	数人以上	現地サポートスタッフ

表 17 拡大期／小児 WS 現地協働運営者の主な役割

段階	現地協働運営者	役割【コミュニケーションの目的】
1) 依	アートコーディネーター	外部取材者からの取材依頼について、アーティストから相談を受けた【取材依頼】
2) 企・準	アートコーディネーター、C 氏	外部からの取材について C 氏と検討し、院内関係者への周知や取材中の具体的な注意事項等について確認し合った【取材依頼】
3) 現	保育士	定例の小児 WS では、実施日や実施直前に参加可能な患者を見定め、開始前には病室に呼びかけに行くなどして参加を促した【自然な参加の促し】
4) 本	保育士	患者作品の展示がプレイルーム壁面へと広がった際には、アーティストが保育士に展開を打診したことでも実現した【造形内容の新しい提案】 定例の小児 WS では、活動開始時に、初めてアーティストと対面する患者や患者家族に活動の目的を説明して、スムーズに開始するように促した【アート活動のプログラム伝達】 参加者の制作のサポートや、声かけ、見守りなどを行った【造形の制作】 保育士の働きかけから、参加できなかった患者のために材料を残していくという回が展開期よりも増加した【活動枠組みの新しい提案】
	アートコーディネーター	取材中には、現場で状況を見守った【取材依頼】
	C 氏	その場で取材中の外部取材者とやりとりをしながら、円滑な取材が行われるように配慮【取材依頼】
	A 氏	定例の小児 WS の中で、制作中の患者と会話をしながら場を活性化させた【造形の制作】
5) 展	保育士	壁面展示作品の配置を整えたり増えすぎた作品の量を減らしたりする管理作業を行い、破損の防止と衛生面から色画用紙の作品にラミネートをかけて保護する作業を自主的に実施【完了作業の伝達】 保育士がアーティストに提案し、水曜日の午前中に小児 WS を開催する週が増加【活動枠組みの新しい提案】

4-2-3 小括：役割の分析とコミュニケーション分類

プレイルームでの小児 WS の実施中に、保育士がアーティストの代わりに病室に行ってその日の題材を実施することが継続するにつれて増えてきたことや、プレイルーム内壁面の展示作品に保育士が自主的にラミネートをかけて保護するという行為が生じた要因として、保育士の小児 WS に対する主体性の向上を見出すことができる。

また、展開期に実施した夏まつり企画装飾用の小児 WS では、普段とは異なり、患者や患者家族が装飾の手伝いという目的を持って制作することで、完成作品数や参加人数が通常よりかなり増加した。この事例から、病院内で造形 WS を実施する際に、完成作品の活用目的が明らかで、通常の参加者ではなく活動へのサポートスタッフ、つまり協働運営者に近い立場で患者や患者家族が参加することで、参加者数が増えて場が活性化される可能性を見出すことができた。

そして、白川村企画と同様に、役割から見出したコミュニケーションの目的を、さらにカテゴリーに分類して整理した。（表 18）。

表 18 コミュニケーションのカテゴリー分類／小児 WS

カテゴリー	双方向重視	伝達重視
創造が主目的	アート活動プログラムの検討 造形の制作 空間装飾の協働 展示構想 造形内容の新しい提案	アート活動のプログラム伝達 完了作業の伝達
現実化が主目的	企画・準備段階の事前配慮 活動の依頼 実現させるための手法の検討 自然な参加の導き イベント実施中の確認や対応 安全な実施 取材依頼 活動枠組みの新しい提案	現場情報の伝達
交流が主目的	質疑応答	感情伝達 賛同伝達

5 本研究のまとめ

本稿では、社会の多様な現場でのコミュニケーションを伴うアート活動における現地協働運営者の存在意義を具体的に明らかにするために、白川村企画と小児 WS の 2 プロジェクトを対象として、現地協働運営者の具体的な役割を記述し、コミュニケーションの目的をカテゴリー化することができた。そして、それら进行分析することで、両プロジェクト間の現地協働運営者の存在意義における共通点と相違点を、以下のように整理することができた。

まず、共通点についてだが、コア協働運営者だけでなく、多くの立場の現地協働運営者が活動を支援していることが共通していた。また、その中でも、コア協働運営者がアーティストと密にコミュニケーションをとり、特に強く活動を支援していることが、具体的な役割から見出せた。そして、活動が継続することで、コア協働運営者が徐々に主体性を得ながら活動を支援していく可能性も共通していた。

次に、相違点についてだが、白川村企画（地域の現場）では題材を考案するプロセスにおいてアーティストと現地協働運営者の間で双方向のコミュニケーションがとられていたが、小児 WS（ケアの現場）では基本的にはアーティストが単独で題材を考案した。そして、本番段階直前には、小児 WS では、現地協働運営者の保育士が患者の様子を伺って参加を促すという役目が重要であったが、白川村企画は来場するイベント形態であったため、小児 WS ほど本番段階直前の現地協働運営者が参加を促す様子は見られなかった。また、場を活性化する方法として、小児 WS では現地協働運営者による日常会話に近い声量の言葉かけや会話によって活性

化がなされていたが、白川村企画では現地協働運営者による声量のある声に参加者を惹きつけ場を活性化させていた。そして、白川村企画では、記録写真・映像の公開も目的としているため、記録係や広報係として現地協働運営者の存在意義が大きかったが、そういった目的がやや低い小児WSでは、現地協働運営者による写真撮影はごく稀に行われる程度であった。ほかに、外部から取材が入る際、白川村企画では記者が比較的自由に動いている様子であったが、小児WSでは、現地協働運営者は参加患者に配慮するために依頼時から取材中まで特に丁寧に対応しており、多大な存在意義を見出せた。以上を本稿の成果とする。

但し本稿では、現地協働運営者自身へのインタビュー調査等は行えていない。よって、今後そういった形態の調査も実施していくことで、結果の質を高めていく必要がある。また、他のアーティストによるアート活動にもさらに着目していくべきであると考えている。

（謝辞）

本稿の分析対象としたゴブリンPは、どの活動も実現に至る過程で多くの人々に支えられてきた。各現場の関係団体の皆さま、活動への参加者の皆さま、サポートしてくれた筆者大学の歴代学生の皆さま、関係者各位に心より感謝申し上げます。

注

- 注1 社会の多様な現場に広がるアートプロジェクトの事例が紹介されている（参考文献1）。
- 注2 活動を牽引する存在であるアーティストとしては、経験豊富なアーティストのほかにも、アートやデザインを学ぶ学生や一般市民が中心となって務める場合も見られる。
- 注3 高橋綾らは、病院での人々のコミュニケーションを重視したアート活動の実践について述べている（参考文献2）。
- 注4 林容子は、目指すところを「精神力の喚起」と述べ、ヘルスケアの現場におけるアートのあり方について述べている（参考文献4）。
- 注5 これら内容については、筆者前著（参考文献5）にて解説している。
- 注6 アート活動という言葉は、音楽や演劇などの造形以外の表現活動も指すと捉えることもできるが、本稿では「主に造形的な作品を表現するアート活動」を指すこととする。
- 注7 岩田祐佳梨は、病院におけるアート活動運営の実践から、活動の継続的な試みによって関係者（職員、担当者、作り手）の関係性が「相互啓発関係」へと発展する構造について述べている（参考文献8）。
- 注8 過去のゴブリンPの詳細については、筆者の個人ウェブサイトに掲載されている（参考文献10）。
- 注9 ゴブリン【goblin】の意味として「小鬼。化け物。人間にいたずらをする妖精」と記載されている（参考文献11）。
- 注10 具体的には、基本的に「顔」がつき、胴体や手足の有無は題材や制作者の表現性によって異なってくる。また、1）実物自体を用いて直接手を加えて制作する場合と、2）実物とは別の素材で物や事柄の形象を制作して表現する場合（粘土造形や壁画など）がある。
- 注11 例外もあり、後述する病院小児病棟における活動ではペイントTシャツを着用している。

- 注12 筆者前著における「FAACの内容」をブラッシュアップして述べた（参考文献5）。
- 注13 筆者は、現地の外からのサポートスタッフとして特に筑波大学生から、実施イベントのサポートや実施地滞在前の準備制作のサポートなど、多大な支援を受けてきた。
- 注14 アーティストがイベント直前に現地に来る場合や、アーティスト不在でイベントが行われる場合は、イベントの前日や直前に協働運営者が行う準備段階も現地準備段階とする。
- 注15 「病院ゴブリン博士展—ケア×アートII」（場所＝筑波大学芸術系ギャラリー／日程＝2014年12月2日～2015年1月30日）
- 注16 主体性の向上に関連する研究としては、市川寛也がアートプロジェクトによる学びの意義を論じ、「子どもたちの創造的な主体性を回復する上でアートプロジェクトという方法論の持つ有効性」を明らかにしている（参考文献12）。
- 注17 状況によっては月に数回やそれ以下の実施頻度となる時期もあった。実施時間帯は基本的には平日の夕方（ときおり午前中）で、約1時間（状況次第で延長）の活動として実施された。
- 注18 通常の小児WS実施時間帯には約4名の保育士が勤務しており、その内1～3名が小児WSのサポートを担当している。院内に保育園があるわけではなく、保育士は普段、乳幼児の見守りや遊具の消毒、その他保育活動を行っている。
- 注19 参加する保護者が子どもの制作をサポートをする様子はよく見かけられる。それを、本番段階の間に「サポートスタッフ」へと立場が変わったと捉えることもできるが、一般的な行動であるため記述は省略した。

参考文献

- 1) 藤浩志、AAFネットワーク：地域を変えるソフトパワー アートプロジェクトがつなぐ人の知恵、まちの経験、青幻社、2012
- 2) 高橋綾、宇田恵：あかりアートプロジェクトの実践 癒しのあかり展／コミュニケーションから生まれたあかり展、環境芸術、No. 8、pp. 21-28、2009
- 3) 熊倉純子監修：アートプロジェクト 芸術と共創する社会、水曜社、p9、2014
- 4) 林容子、湖山泰成：進化するアートコミュニケーションヘルスケアの現場に介入するアーティストたち、レイライン、p. 15、2006
- 5) 小中大地：社会の多様な現場でのコミュニケーションを伴う造形表現活動の展開 ゴブリンプロジェクトのコミュニケーション関連要件による分析、芸術学研究、No. 22、pp. 11-20、2017
- 6) 北川フラム：ディレクターズカット・大地の芸術祭 現代美術がムラを変えた、角川学芸出版、2010
- 7) 前掲4）、pp. 76-77
- 8) 岩田祐佳梨：病院共用空間における社会実験からみたアート活動の導入プロセス、筑波大学、博士論文、pp. 131-132、2017
- 9) 長崎市自主文化事業『長崎アートプロジェクト』について（報告）、http://www.city.nagasaki.lg.jp/shimin/190001/191001/p031541_d/fil/houkokusyo.pdf（参照 2018. 4. 30）
- 10) 小中部屋、<http://konakabeya.exblog.jp/>（参照 2018. 4. 30）
- 11) 松村明編：大辞林 第三版、三省堂、2006
- 12) 市川寛也：参加型のアートプロジェクトによる学びの有効性に関する考察 《放課後の学校クラブ》の実践研究を通して、美術教育学、No. 36、pp. 43-56、2015

図版典拠

- 図1、5、6 筆者撮影
図2、3、4 協力者撮影・提供
表1～表18 筆者作成